

春日潜庵と歴史観

正田啓佑

はじめに

近代日本を作り上げるのに大きな役割を果たしたのは明治維新であるが、その維新を作り出すのに大きな働きを演じたのは幕末の志士である。その志士を動かした思想の一つに陽明学があることはこれまでに多くの論がなされており、ここで取り上げる春日潜庵もその一人であるが、潜庵が陽明学の思想を実践するにおいて、それを補ううえで重要な働きをなしているのが歴史の認識である。本論は潜庵の歴史認識がどのようなものであったかをかいま見ようというものである。

一、幕末における儒学思想

江戸時代の開幕に当たって、徳川家康（1542—

1616）は天下を馬上で取ることはできたが、馬上で治めることはできないと考えて朱子学を政治の根本思想として採用した。その結果、林羅山（1583—1657）を登用し、以後林家が大学頭に任ぜられることになり、其の学問である朱子学が官学として我が国の学術を支配して来た。林鷲峰、林鳳岡（1644—1732）と続き、五代將軍徳川綱吉（1646—1709）のときに林家の私的な孔子廟が湯島に移されて聖堂として幕府の公的な施設となり、そこに昌平坂学問所がつくられた。それ以後、朱子学は官学として幕府の保護下にあったため、思想的には発展することなく、魅力を失っていった。その代わりに陽明学が中江藤樹（1608—1648）によって伝えられ、其の弟子熊沢蕃山（1619—1691）が其の思想によって、

当時の政治を批判したため、危険思想として弾圧されることで陽明学は陰をひそめるが、世の中では、朱子学以外の思想、古学派、古文辞学派や折衷学派等に対する関心が深まって行ったため、寛政の改革の一つとして、老中松平定信は寛政異学の禁（1790）を発令し、朱子学の強化をはかった。

この当時の官学を中心である大学頭に林述斎が登用され、朱子学の再興に努力し、後世、林家の中興の祖と称されたが、その門下の佐藤一斎（1772—1859）は、陽朱陰王と言われるように、朱子学のみでは打開できない思想状況になっていたので、陽明学にも関心を寄せ、その思想を学び修得していた。実際、彼はその後、所謂大塩平八郎の乱を起す陽明学者大塩中斎（1792—1837）とは交友があった。そしてこの佐藤一斎の門下から、幕末に活躍する志士が輩出するのであるが、そこには、朱子学から陽明学の思想、またそれらがお互いに影響しあつてより高めた思想となつたものまでが横溢していた。

佐藤一斎は、多くの門下を養成したが、そのうち朱子学においては安積良斎、大橋訥菴、河田迪斎、中村敬宇、楠本端山・碩水兄弟などがおり、陽明学では、山田方谷、吉

村秋陽、佐久間象山、春日潜庵、池田草菴、東沢瀉らがおり、山田方谷の門下に河井継之助が、また象山の門下に吉田松陰、そして松陰の松下村塾からは、幕末維新に活躍し、明治政府を動かす志士を数多く輩出した。この中の、池田草菴・春日潜庵・吉村秋陽と林良斎は深い交友関係にあり、そこで交わされた書簡や文章は、池田草菴が『鳴鶴相和集』（*1）として編集している。なお最後に上げられている林良斎は、大塩中斎（平八郎）の門で陽明学を学んだ多度津藩の家老である。

二、春日潜庵の生涯と学問

春日潜庵、姓は源、字は子賛。幼名は直之助。十歳の時に仲好に改名、二十四歳で再び改名して仲襄と言う。其の先祖は宇多天皇の第七皇子の敦実の第二子源雅信公にはじまり、七世の子孫仲康が京都の春日の坊に住んでいたことから春日を氏とした（*2）。十七歳の時、鈴木遺音の門に入り、程朱学を学んだ。この塾で富松万山、中沼秋水らと交友。天保元年（1830）、友人の神晋斎の家で『王陽明文録抄』を見た。そのことを次のように述べている。

既に弱冠（二十歳）の始めに於いて、一日友人神晋斎

(名は惟孝)の家に遊ぶ。偶たま『陽明文録抄』の机上に在るを看取つて之を読み、忽然として心に会する所あり。心窃かに其の文と其の人と為りを欽慕せり。

(*3)

このことを、八年後の戊戌(1838)の年に書いた「記夢」にも次のように述べる。

友人の家に遊び、陽明王子文録抄を見、取りてこれを読む。浩々乎として其れ涯無く、渾々乎として其れ畔たり。予、惶然として以て失ひ、駭然として以て驚く。

然れども其の言間、朱子と牴牾す。乃ち心竊かに其の文と人とを慕ふ。而れども其の学に疑ひ無き能はざるなり。爾来、心胸に往来し、疑ひ自ら決する能はず。

年二十七、王子全集を得、日夜誦読すること、幾数十過。中心豁然たり、覚えず喟然として曰く、人と為り是に至りて止むべし。学を為すは当に是くの如くして止むべし。(*4)

このように、初めは『王陽明文録抄』を読んで、感銘をうけるが、程朱学を学んだものにとつて、朱子学と齟齬するものがあるため、素直に陽明の思想を受け入れることはできないものがあつた。それでもこの文章と作者である王

陽明が胸中に往来し、慕いもとめるようになっていく中に、二十七歳の時に『王陽明全集』を入手し、毎日毎晩、何十回と読むことで、これこそが自分の求めるものと覺つた。またこの翌年、劉念台の『劉氏人譜』を得て読み、劉念台へも強い関心を抱き、読後の感銘を友人の池田草菴に次のように述べている。

子敬(池田草菴の字)足下、頃(このごろ)、襄(潛菴の名)、明の劉戡山先生の著はす所の人譜を獲。先生、名は宗周、字は起東。所謂念台先生なる者なり。

先生精忠大節、鼎革の際、食はざること二十余日にして卒す。襄、嘗て其の平生を考へ、悚然として敬嘆し、潛然として悲慕す。乃ち思ふ、吾其の人を見得ず、其の書を得れば、則ち我亦当に努力して以て古人の域に造るべきなり。今、其の書を獲、我以て吾が懷を慰むべし。蓋し戡山の学、姚江を以て宗と為し、致知を以て要と為し、而も慎独を主と為す。人譜を作り以て学ぶ者に授く。而も其の用功の精、条文の縷晰、一以て之を貫く。夫れ姚江の致良知の教、之を孟子に本づけ、委曲明瞭なるも、然れども末学の弊、徒だ良知を知るのみにして、之を致すを知らず。狂肆放蕩して、良知

の変じて、私知と為る。人譜の一書、此れ以て其の弊を救ふべし。(*5)

当時、潜庵は、京都の貴族久我家に諸大夫として仕えて、その家政を掌どっていた。久我家は朝廷における重臣であった関係から、勤王の志士が出入りしていた。潜庵もおのずから彼らと交わり、関与していくことになる。ところが天保十一年(1840)、久我家の財政について負債を改めようとしたことから讒言され、時の関白鷹司政通から百日の閉門を命ぜられ、久我家を致仕し学問に邁進し、修養して自己を磨くことになった。そのことを上田亮に答える書簡に次のように述べている。

襄、身を危難之中に抜き、門を杜じて愆ちを省りみ、閑かに旧書を読み、乃ち身を反りみるの益を覚り、来書懇々我を見る無きの歎き有り。是れ大いに然らず。夫れ良知の明、傲として白日の如し。我を見ずと雖も、尚ほ見るが如し。何ぞ其れ見ざるの憂ひぞ。且つ吾が生平、塵事に奔走し、未だ嘗て一日の閑も有らず。今や放逐屏絶さる、是れ昔人の所謂一条の路を好む者と与に、吾の問学、是より上達すること、未だ量るべからざるなり。(中略)此れ心の良知、万古一日なり。

世の姦猾放蕩無頼の子弟、彼豈に是非之心無からん。惟だ其の我に在る者未だ尽きざる有り。惟だ其れ未だ尽きず。是を以て彼の姦猾放蕩無頼の如きなり。然らば則ち当に自ら反るべきのみ。苟くも自ら反りて、自ら嫌きたらざる莫きや、彼に於て何をか責めん。此れに由りて之れを觀れば、憂患之来たるは実学に非ざる無きなり。嗟乎(あゝ)、豪傑之士に非ざるより、吾誰と与にか此れを語らんや。(*6)

この閉門の処分を生かして学問に励み、百日の閉門が解かれても、久我家とは以後約十年の間、往来をしなかつた。その間、彼の下に、多くの士人が訪れ、潜庵も講学し人材を育てた。

嘉永三年(1850)、久我家の負債が改善されないため、再び久我家に求められて執政として仕え、その関係から勤王討幕の志士と交流、西郷隆盛が訪れたりして、それが幕府の忌諱に触れて京都西町奉行に捕らえられ、六角の獄に入れられた。それに引き続き安政の大獄にも連座して永押込の処分を受けた。文久二年(1862)、赦されて以後、勤王の士として国事に奔走して明治維新を迎えた。

潜庵は明治維新に至るまでの間は国事に奔走していたため、

『鳴鶴相和集』に集つた人達との交友は途絶え、その間に、林良齋は早く亡くなつていたが、吉村秋陽も慶応二年に亡くなり、残るは池田草菴のみとなつていた。彼らとは、生き方を異にするように、そこには潜庵の思想との相違があつた。

三、春日潜庵の思想と歴史書

潜庵が『王陽明文録抄』を読んだとき、同時に『資治通鑑』も読んでいた。潜庵は、幼いときに「温公破虜図」という絵をみて、司馬温公に興味を抱き、温公を慕う心を持ったことを次のように述べる。

余、幼く齡四、五歳の時、通俗節用集なる者を看しとき、温公水虜を破りて童子を救ふ図なるもの有り。甚だ喜び、以為らく虜破るべきなり。而して救はざるべからざるなり。此れ由り公を慕ふの心甚だ切なり。成童に及び、始めて公の伝家集を読み、益々喜ぶ。乃ち自ら其の文章数篇を繕写し、一冊子を作る。弱冠に至りて公の史を読むこと数四、研磨究力し、以為らく相業を勤むる者、是れ必読の書なり。而して深く公の之を当世に用ふる能はざるを惜しみ、之を後世に遺し、後の学者、宜しく心を用ふべきなり。（*7）

これは明治五年の潜庵の回想であるが、幼い時からの関心事に司馬光の存在を忘れてはならない。青年期から王陽明、劉念台、王心齋など思想家の書を読み、それらを刻する（*8）ほどの心の入れ込みようではあつたが、一方ここに述べたように、歴史にも大きな関心を抱いていた。それで柘植某に与えた書簡に、夜は灯火を掲げて司馬温公の『資治通鑑』を読んで、千古の英雄を批評し、過去の姦諛なる者を討ち、それに飽きると瞑目端座して心を清澄にしていた（*9）という。このように歴史書として最も重視していたのは、『資治通鑑』であり、それについては、

温公通鑑二百九十四卷、千三百六十二年間の事跡を載す。其の事浩繁、治乱興亡之理、此れに尽せり。予、弱冠より始めて之を読むこと、今に至るまで既に四回。因りて知る、其の運の事に於ける它無し、吾が方寸の中に在るのみ。方寸盡ならざれば、此の浩繁、徒爾に浩繁にして、事に益無きのみ。（*10）

と述べている。潜庵は弱冠（二十歳）から、これを書いた丙寅の年（慶応二年、五十六歳）にいたるまで、四回読破し、歴史の興亡の理を自分のものにし、それによって世の中の推移を判断した。彼は門弟の末広重恭に、「天下を経綸す

るに、此の一書（『資治通鑑』）にして足れり。何ぞ多きを要せん」（*11）と述べている。彼は經典や歴史書を読む意義を次のように考えていた。

襄、嘗て謂へらく、士君子、經を誦せざれば、則ち以て本を立つるに足らず。史を読まざれば、則ち以て世を経るべからず。經は以て大本を立て、史は以て經世を務む。夫れ大本立ち、而して道邪ならず、經世に務めて、術疎ならざれば、乃ち古の不朽の者、企てて及ぶべし。（*12）

ここで潜庵は、士君子と言われる人は經典を十分に学ぶことがなければ、自分の依つて立つ根本ができないし、歴史書を読んで歴史をよく理解していないなら世の中を治めることはできない。従つて經典の理解と歴史的に考えての正しい判断がなされれば、国の歩む道は邪悪な方向にはならず、政治も民に行きわたることになる。そうして古代の理想国家のようにしなければならぬと考えている。ここで潜庵が士君子たるものが、いかなる者であるかについて、そして自らそのような士になり、ともに活動する人を求めて次のように述べる。

姚江の真伝、更に秘訣無し。本体即工夫、工夫即本体。

苟くも善く此の語に徹せば、則ち千古の真伝、此に在り。

姚江の良知の教、真に千古の秘を闡く。簡にして尽せり。所謂尽すとは本体即工夫、工夫即本体の謂ひなり。予愚不肖、力を此学に用ふること、蓋し茲に二十年、始めて此れに見る有り。往々是を以て人に告ぐるも、信ずる者鮮し。（*13）

陽明学の真伝つまり「良知の教え」こそ、千古の秘とされているもので、秘訣などというものはない。簡単に言えば、本体がそのまま工夫であり、工夫が即本体ということ、この言葉に尽くされているといつてよい。そして潜庵自身も二十年来努力して来たことであるが、他の人はなかなか信じてくれないと嘆く。学者というものは、役立たずだと次のように批判している。

古今の文士・經生、往々にして国家の用を做さず。蓋し其の平生の精神散走し、或は文章を以てし、或は訓詁博識を以てす。故に自己の精神、神ならず、料事精ならざれば、卒に庸庸碌碌の徒為るを免れざるのみ。（*14）
と言ひ、また次のようにものべる。

經を誦し、伝註に苦しむは庸儒の事なり。之を誦して

只だ惕然たるを覚え、また欣然たるを覚えて超然たるは、或は庶幾からんか。 (* 15)

それでは、学問する者に何が足りないかといえは、それは志である。志の必要性はすでに昔から言われていることであり、王陽明も「示弟立志説」を書いているが、潜庵も、弱冠左右つまり二十の頃、「立志の説」を書いたが、その時は、誠・敬の二字を立志の本とし、それを害するものとして酒・色・財をあげて自警としたが、己酉（嘉永二年）潜庵二十九歳に改めて「立志の説」 (* 16) を書いている。そこでは、この世の中（幕末の世であるが）は、大道が廃れ、民の欺瞞の行為は日に増し、人々はどのようなにして生きれば良いか分からない。このような世には、刑名・法律の思想や虚無・寂滅の言葉が横溢している。そのようなときに、儒士は章句や訓詁の研究をしているが、これでは刑名・法律、虚無・寂滅の思想に勝つことはできない。そこで志ある士人は、次のようにあれと言う。

士の將に志を天下に立てんと欲するや、蓋し不欺（欺かざる）由り始めん。而して民の偽りの生ずるや欺くに由りて開く。夫れ欺けば則ち偽り、偽れば則ち大道亡ぶ。而して異端起きる。故に欺とは衆偽の門。欺か

ざるは大道の階なり。 (* 17)

ここで潜庵は、不欺つまり欺かないことから始まるということである。そしてこれこそが大道を歩むことであり、欺かないために誠であれという。そのことを、「亡妄（妄りなること亡し）之を誠と謂ふ。不欺とは乃ち其の亡妄の体を保つ」ことであると述べた後、次のように続ける、

吾が心を欺かざれば則ち亡妄の体、固り常に湛然として礙げ無し。礙無ければ則ち入るとして自得ならざる無し。自得すれば則ち志ここに立つ。 (同前)

このようにして「我、吾が心を欺かざれば、則ち物の物為りて、亦我を眩ます能はず。而して豈に以て動かすこと有らんや。湛然として以て動かざるは、亡妄の体なり。夫れ湛然として動かず、確然として守る。此れを之れ立志と謂ふ。而して欺かざるは、其の要ならんか」とこの文を結んでいるのであるが、「閑窗餘筆」には、

邪路に入るは易きに非ざるなり。而して易きとは何ぞや。正道を踏むは当然なり。而れども難きは何ぞや。学ぶ者は卓然として志を立てて、当に難易の弁を知るべし。 (* 18)

とも述べて志を立て、そうして学問の道に入るとい

ある。その学問とは何か、次の文は「丙寅録」にあるもので、丙寅は慶応二年、潜庵五十六歳で、政治的活動の真つ只中の体験から出たものである。

学は反求に在り、自ら責めて工夫する最も切なり。

人を責むるは易し、己を責めざるの罪なり。

自ら責むること厚し。何ぞ人を責むるに暇あらんや。

終身自ら責め、悼々然として余地有るかな。

自ら責めて、漸く天性に達す。

老大自ら責め工夫し、日々益々宜しく切なるべし。学は反求に在り、徳は須らく自得すべし。自ら反りみて深切なれば、花を植え竹を栽うるにも、学は其の中に在り。

学は反求の工み無ければ、書を読み道を講ずるも亦徒然なり。（*19）

このように、学問は、先ず自分を責め、反省し求めることから始まる。そして自得することができて、自分のもとめる根本の地に立つことができる。そうなること、

千古を歴覽して、志、内に定まるは難く、事、外に応ずるは易し。根本の地は、以て明らかならざるべからず。以て養はざるべからず。其の工夫、次第、以て講

ぜざるべからず。（*20）

というように、過去の歴史を通覧する時、志が定まることは難しいことだが、自らのよって立つ根本の地に立つことができれば、現在外で起こっている事象に対しても、平常心でもって対処すれば、容易に應じることができる。従つて根本を明らかにし、それを推し進め、そこでの工夫も研究しなければならぬのである。

さて潜庵は、『資治通鑑』を読む中で、何を学びとつたか、勿論過去の歴史事象より、今に生きるための教訓を学ぶことは当然だが、彼の語録である「潜菴偶筆」や「閑窗餘筆」などを読むとそこに扱われ評価されているのは、政治闘争や戦争の中で、節義を全うし、国に殉じた人々に焦点が合わされている。従つて戦乱や社会的混乱の中にあつた魏晋南北朝や五胡十六国の人々への言及が目立つ。そのことは潜庵が若い時、富松万山と浅見綱齋の『靖献遺言』を読んだ時に、悲憤慷慨した(*21)ことの延長上にあること、屈原から方孝孺までの八人の詩文を通しての忠臣義士の生き方とつながる。それとともに自分のこの世に生まれてきたからにはその学問を實踐する使命があるはずだと覺り次のように述べる。

吾儕の学は、苟も古に志し、聖賢の域に到らず、功業、興王の佐けを做さざれば、則ち虚しく一生を過ごすのみ。大いに哀しむと謂ふべし。然れども彼の遇・不遇は命なり。我に在りし者、孜々として以て勤めざるべからざるなり。安政乙卯。（*22）

この文にある安政乙卯とは二年のこと、潜庵四五歳、政治的に志士との交流を盛んにし始めていた頃である。興王の佐、つまり勤王の運動を自分の使命としていることがわかる。この「潜菴偶筆」には、次のような言葉もある。

士人、世に生まれて、縦令ひ博聞強識、文章典麗にして、性命を高談し、衣敝れ、履空しくも、而も人心世道、家国の術に益輔する無ければ、乃ち徒だ虚偽の名を被るのみ。（*23）

大学の天下を平らかにするの一段、賢・不肖を進退するの上に在り。而して賢・不肖を財用上に在りて之を見るは、真に是れ活学問なり。訓詁の豎儒の知る所に非ざるなり。（同前）

このような思想をもって潜庵は国事に奔走した結果、明治維新を迎えることができた。

四、西郷隆盛と潜庵の晩年

西郷隆盛（1827—1877）が潜庵に会ったのは、安政五年（1858）の七月（*24）で、潜庵四十八歳、隆盛三十二歳のときであり、潜庵は西郷を志士の中で高く評価し、西郷も潜庵をその人格、学問を尊敬し、信じていたので、明治三年の春、西郷は弟の子兵衛及び門下の士十数人を遣わして学業を受けさせている。（*25）

維新政府成立後、この革命運動の中で生き残り、新しく政府を作つて行く人々には、功名利達に汲々とした人達が多く、尊主安民の心を忘れた嘆かわしい状況になっているのを慨嘆した潜庵は、明治七年の五月二十二日故郷に帰つた西郷に出慮を願つて出した書簡に次のように言う、

僕竊かに謂へらく、方今の士風の振るわざる、此時より甚しきは莫し。廉恥退讓し、衰頹して地を掃ふ。士の稍才幹有る者、専ら營利を意ひ、汲々然として商賈之業を習ふ。醜として其の恥を知らざるなり。風俗人心、日々以て陥溺し、返るを知らざるなり。夫れ亦何ぞ以て士人之業を講じるを知らんや。士人の業、上は主を尊び、下は民を安んず。主を尊び民を安んずるは、乃ち其の大綱なり。（中略）執事（西郷）は豪傑の士にして、平生は声色財利に淡く、之に加ふるに艱難困

苦鍊磨の功を経るは、既に已に尋常に非ざるなり。其の天下の士風の衰えたるを興起振作せしむるは、甚だ難きに非ざるなり。此の事、執事に非ざれば、則ち誰をか望まん。（*26）

潜庵は西郷に書簡を出したものの、西郷は薩摩藩に帰ったままなので、秋八月立秋の日に再度手紙を出した。それにもまた次のような文面がある。

今日の勢、合へば則ち事成り、離るれば則ち成らず。其の時機の決は、呼吸之間に在るのみ。願はくは執事、無我の心を体して、意必の見を去り、念天下の生民の困苦を念ひて、決然として東京に出れば、則ち天下幸甚ならん。（*27）

潜庵の西郷観は以上によってある程度分かるが、西郷は潜庵をどのように見ていたかという点、弟子に次のように述べている。

貴様等は書物の蠹になつてはならぬぞ。春日は至つて直人なぞ。従つて平生も厳な人である。貴様等修行に丁度宜しい。

此れからは、武術許りでは行けぬ、学問が必要だ。学問は活きた 学問でなくてはならぬ。其れには京都に

春日と云ふ陽明学者がある。其処に行つて活きた実用の学問をせよ。（*28）

ここに、陽明学の思想を生きた二人の姿（*29）が現れている。潜庵は、国事に奔走しては、捕らえられて牢に入つたり、蟄居させられたりしているが、此れらから離れた日常の生活での読書は、「史を読めば無窮の懐ひ有り。千古を洞観す。一たび古今を視れば、人生の一大快事なり」（「閑窗餘筆」）「浄机明窓、聖經賢伝を玩索し、或は又史を読み、古今を評隲するは人生の一大快樂なり」（「丙寅録」）という言葉が表しているものであつたのではないだろうか（*30）。西郷隆盛が西南戦争で自刃した翌年に、春日潜庵は六十八歳で亡くなり、維新後死ぬまで交友した池田草菴も半年後に亡くなった。

〔注〕

*1、岡田武彦著「明末と幕末の朱王学」および解題（『近世後期儒家集』所収。「日本思想大系」47、岩波書店 1972年3月刊）

*2、春日仲精著『春日潜菴先生影迹』第一章、家系と幼時。

春日潜庵の伝記の基本資料。以下の記述も多くこれに拠る。春日仲精は潜庵の孫で、大正乙卯（4年、西紀1915）に

書かれた。大西晴隆著「春日潛菴」(大西晴隆・疋田啓佑『春日潛菴・池田草庵』中国古典新書 明德出版社 昭和62年刊所収)にも詳しい。

* 3、同前。第二章、修養。

* 4、『潛菴遺稿』巻一。『潛菴遺稿』はすべて原漢文であるが、引用に際しては、筆者の手による訓読文とした。

* 5、同前。「与池田子敬書」

* 6、同前。巻三、「答上田亮」

* 7、同前。「書温公破甕函」

* 8、弘化三年に『戢山人譜』を刻するため序文まで書いているが、刊行にまでは至っていないように思われるが、未詳。『王心齋先生全集』は弘化四年に潜庵の点により、刊行された。

* 9、『春日潛菴先生影迹』第三章、学説。

* 10、『潛菴遺稿』巻三、「丙寅録」

* 11、同前。巻末、末広重恭撰「潛菴先生小伝」

* 12、同前。巻一、「上鈴木遺音老師書」

* 13、同前。巻三、語録「潛菴偶筆」

* 14、同前。

* 15、同前。語録「閑窗餘筆」

* 16、同前。巻一、「立志説」

* 17、同前。

* 18、同前。巻三、語録「閑窗餘筆」

* 19、同前。語録「丙寅録」

* 20、同前。巻三、語録「閑窗餘筆」

* 21、同前。巻一、「題靖献遺言」。なお本文中は富季念とあり、富松万山。名は畏命、字は季念。潜庵と同じ鈴木遺音門下。

* 22、同前。巻三、語録「潛菴偶筆」。この文末に安政乙卯とある。

* 23、同前。

* 24、『春日先生影迹』には「安政四年四月、西郷吉之助(隆盛)

等来り、国事を談ず。七月、再び来たり謀議する所あり」とあるが、大西晴隆氏は『春日潛菴』で、「四月の来談はおそらくありえず、七月を締交の発端と見るのが妥当であろう」と述べる。* 2の書。P 119。

* 25、同前の『影迹』所収の年譜。また末広重恭撰の「潛菴先生小伝」(『潛菴遺稿』末尾所収)

* 26、同前。巻三、「寄南洲西郷翁書」

* 27、同前。

* 28、『西郷南洲遺訓』(岩波文庫、1981年21刷) P 73-74。

* 29、大西晴隆著『王陽明』(「人類の知的遺産」25) 講談社、昭和54年。「不運の経世家春日潛菴」に、「従来の隆盛伝はほとんど触れていないが、両者(潜庵と隆盛)の関係は深くかつ長い」云々。p 404-405。

* 30、晩年の潜庵については、村上作夫の『東遊日記』に、晩年の言葉や姿が描かれていて、窺える。(明治六年七月一日から八月二十四日の間に、村上作夫が潜庵を訪ねて先生(潜庵)の言葉や様子を記録したもの。(吉田公平・森博 著「村上作夫も『東遊日記』について」に翻刻と解説がある。(『東洋古典学研究』第十九集、及び吉田公平 著「春日潛菴の晩年―村上作夫『東遊日記』の世界―」(東洋大学アジア文化研究所「研究年報」第39号)

(福岡女子大学名誉教授)